別れの詩

夏目洋介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
別れの詩

【Ｎコード】
Ｎ９２２８Ｄ

【作者名】
夏目洋介

【あらすじ】
女性の立場から別れをとらえてみました。

（前書き）

恋愛の暗い部分を書きました。涙を流してもらえたら幸いです。

★港★

絶対に無くならないもの

それはわたしとあなたの愛

わたしはそう信じていた

だけど・・・

それは簡単に無くなってしまった

わたしは何度もあなたに聞いた

「ねぇ、私を愛してる？愛してるならそう言ってよ。言わなきゃ分からないよ」

あなたは何度も答えてくれた

「あぁ、愛してるよ」

わたしはそれで満足だった

でもそれは違ったんだね

わたしの一人よがりだったんだね・・・

わたしは今あなたと一緒に来た港にいます
隣にいるはずのないあなたを見ています
そこでわたしはあなたにこう言うでしょう
「私はあなたを愛しています」
波の音に消されるかもしれない
船の音に消されるかもしれない
でもきっとあなたに聞こえると思う
なぜなら・・・
あなたはもう・・・そばにはいないのだから
わたしの心の中にしかもう見えないのだから・・・
あの時言えてたら少しは変わってたかな
ねぇ答えてよ
波と船の音しか・・・聞こえないよ

★温もり★

彼はいつもこうだ

一緒に寝る時に必ず私の腕と胸の間に入ってくる
子供のようにクークー寝息を立てる年下の彼氏
私はそれがいつも嫌だった
私が彼の腕の中で眠りたかった
男らしく頼りになる彼氏になってほしかった
彼にそのことを言うといつも困った顔をした
それがまた私に苛立ちを覚えさせた
ある日、私の前から彼がいなくなった
涙は出なかった
いつかこうなることは分かっていたから
今日はベッドには私の温もりしかない
夜中ふと目覚めると
私の腕で彼が寝ていた
私はふいに彼を抱きしめた
・・・そこには何も存在しなかった

私は彼がいない存在を初めて感じた

そして・・・・

涙が・・・止まらなかった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9228d/

別れの詩

2010年10月21日23時25分発行